

社会的エネルギー - を引き出す存在

ある地方都市の公共機関が企画した講演会と障害児地域支援ネットワークの会議に参加した。

講演は、ある障害児の母親が、24時間、365日の支援を行うNPO立ち上げに至る経過と、現在の活動内容に触れるものであった。障害児を持つ母親は、なぜ働けないのかとの疑問が立ち上げの大きな要因ただけに、まさに至れり尽くせりの支援の感があり、また障害児だけでなく、一般の子育て家族まで支援の対象にしており、「現状の福祉施策の現状で、よくぞここまで」と感服した。

また、この母親は、他人任せでなく自分が職員としても活動している。重症児の脱施設化、そして重症児の地域での生活支援方策の一つの示唆に繋がる活動と私には思え、大変参考になった。全国には、実に積極的な親があり、またそれを支える地域があるものである。そのエネルギーを引き出している重症児の存在は凄いいし、大変価値ある仕事をしてることになる。

会議の方は、地域で色々な活動をしている若い母親の意見を拝聴できた。日頃、既成の長年活動している親の会では、若い親たちがなかなか入会してこないという悩み。一方、今回の若い親達は、「親としての先輩から、もっともっと自分たちの活動へ、長年の経験からのアドバイスを貰う機会が欲しい」という。

このギャップは、どこに問題があるのだろうか？そこで私なりの解釈だが、若い親達は、福祉、医療、教育等が分類化し、診断名、支援策、分類教育等で、あまりにも親の集まりが細分化している。確かに、それぞれの障害の抱える問題は異なり、その支援は詳細に期待したいものがある。既成の親の集まりの名称は、その結成の時代故の必要性からであろうし、若い親はその集まりの名称から、我が子のこととはピンとこないのではないだろうか。

かといって、一つの親の会に大同団結する必要はない。支援策を行政に要望していくには、時にどうしても声を集約した方がいい。それだけに、各親の集まりが、共通の支援を要望する時は、連携・協議していく知恵を働かせて欲しい。

昨日もそのことは、アドバイスしたつもりである。つまり、時に「名を捨て、実を取れ」ということである。親同士が情報交換をし、時に連携することこそが、正に障害児が地域で生きていく支援ネットワークの第一歩のように感じた。その連携のコ・デイネ・トは、各親の集まりが相談にくる、その地域の行政の窓口担当者の任でもあらうと思う。